

「放射線授業実践報告会（高校版）」を開催しました。

当協会では、基礎的な放射線知識の普及、教員の放射線教育の取組みの支援を目的として、高校物理教員を主な対象とする授業実践報告会を、3月22日（土）、東京・虎ノ門で開催しました。今回は、昨年6月の第1回実践報告会（中学版）に続く、第2回報告会でした。報告会には、小中学校教員のほか、大学、研究所、団体、企業等の外部支援者を含め約34人が参加し、発表に熱心に耳をかたむけました。

1. 開催結果：

- 参加者数は想定を上回り、また、発表者以外にも高校教員の参加があり、期待以上の規模、参加者構成となった。高校での放射線教育ならびに福島の放射線被災地での放射線教育について参加者間で理解を深めることができた。
- 高校での放射線教育は、中学に比べ、学校や指導教員により幅のあることがわかった。授業対象としては、物理基礎で2年生全員を対象とする例、総合学習で全校生徒を対象とする例、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校での生徒による自主的な学習の例が紹介された。教える内容としては、放射線の基礎知識に加え、福島では身の回りの放射線測定を通じて放射線防護について学ぶ授業例、また、教員の関心により日本の原爆開発の歴史等を扱う例等が紹介された。また、福島第一原子力発電所事故後の放射線教育については、放射線と人間の関係、安全技術と人材育成の視点が求められているとし、将来の技術者・研究者を育てるには、学校教育と産業界との協力が不可欠との発表もあり、高校教育の奥行きの高さが垣間見えた。
- 福島第一原子力発電所事故による放射線の影響についてどう考えるかという点から、得られた知識をもとにリスクを判断する授業ができるようになることとよいし、生徒はそれを期待しているが、SSHでもそこまで至っていないと説明された。
- 福島第一原子力発電所事故を受けて、原子力と理科教育に何が求められているかについて、「原子力と理科教育一次世代の科学的リテラシーのために」（2013年11月、笠潤平、岩波ブックレットNo. 886）が参考になると2名の発表者より紹介があった。（同書では、狂牛病をきっかけに生じた政府・専門家への信頼の危機により大きく方向転換した英国と日本を比較している。）
- 放射線利用のメリットについても授業で扱うのがよいのではとの産業界参加者の発言について、別の参加者から、福島では放射線の被害を被っているという気持ちがあり、授業でどう扱うか難しい面があるとの意見があった。
- 簡易放射線測定器「はかるくん」貸し出し事業は文部科学省委託事業として実施されていたが、2014年度は予算の都合により従来方式で実施することができなくなった。このため、参加者から、教育現場で「はかるくん」利用が難しくなることについて心配の声があった。当協会としては、「はかるくん」の状況について同省関係者と引き続き情報交換し必要により関係者で共有していくこととする。
- 新しく作成された放射線副読本について、福島第一原子力発電所事故ならびに同事故による風評被害の内容が大きく扱われており、理科よりむしろ社会科等の授業で利用するのに向いているのではないかという発言が参加者よりあった。
- 放射線教育支援地域コーディネーター構想は放射線の知識普及に役立つものとして賛同する産業界参加者があった。
- 本報告会の開催にあたっては、当協会のJaif地域ネットワークメンバー、地方関係組織

との相互支援関係のほか、他の放射線教育支援関係者等の人脈や情報交換ルートの助けにより、発表者の人選や参加者募集を行った。今後もこれらのつながりを大事にし、情報交換や課題共有を通じて放射線教育の普及支援を継続していく。

## 2. プログラム：

### (1) 歴史教育としての放射線教育

影森 徹 先生 早稲田大学本庄高等学院 教諭（物理）

### (2) 放射線の物理

やまき 八巻 俊憲 先生 福島県立田村高等学校 教諭（物理）

### (3) 福島高校の放射線教育

原 尚志 先生 福島県立福島高等学校 教諭（物理）

（講演者より各 30 分の発表後、参加者との間で約 1 時間の意見交換会を行った。）

## 3. 意見交換会での主な質問・意見等：

- ・ 高校での放射線授業は、どの教科で、何年生を対象に行うか？全員が受けるか、選択制か？
- ・ 物理の教員自身は、学校で放射線について学んだことがあるか？
- ・ 文部科学省の放射線副読本の活用状況はどうか？
- ・ 物理基礎、化学基礎で放射線についての教える内容に違いはあるか？
- ・ （放射線の）リスクについて授業でどのように扱っているか？
- ・ 放射線利用面の文化も授業で教えるべきではないか？
- ・ 福島第一原子力発電所事故後の福島にはベネフィットはないので、放射線の許容という考え方は生まれない。



以上